本章には、各節末に根本資料をはじめ主なる參考著書はもとより、わが國人のものは論文に至るまで周到に揭げてあるが、讀者には大變有難く感じられることと思ふ。なほ、それらについて多少氣づいたことを蛇足しておかう。

第一節に、明實錄として成祖・宣宗・神宗熹宗とならんで毅宗（崇禎帝）があげてあるが、毅宗には實錄と稱するものはなく、たゞ强ひていへば、國榷がこれに準ずるものといへるであらうか。また李民寏の柵中日錄・建州見聞錄などがあげられてゐるなら、近年稻葉博士などによつて紹介された申忠一の建州圖錄、それを解說した建國大學刊「舊老城」・などもあげてほしかつた。ついでに、滿洲歷史地理第二卷も。

第三・四節では清季外交史料や八朝條約、などもあつてよく、それから、これは著者の失念だとは思ふが、嘯亭雜錄・簷曝雜記の名も見當らなかつたやうに思ふ。

第七章民國政治史（小竹文夫）　これまで出てゐるこの種の叢書風の概說書は、清末までは比較的詳細に書かれてゐても、現代支那史になると、おざなりのものを附錄的に、つけ足してゐるのが多いやうに見うけられるのに對して、本書はこの部分に百ページにあまる紙數をさいてゐる。

特に著者は、多年上海の現地にあつて支那における眼まぐるしい政治的變轉を直接體驗し、現になほされつゝある、人であり、本章において、その現代支那史に對する、たゆまない研究が、それらの深い體驗に生かされつゝ叙述されてゐることは、文字どほり本編の棹尾をかざるものといへよう。なほ讀者は、同じ著者の手になる本大系中の「民國社會史」及び「現代支那史」（教養文庫）をも併せ讀まれるならば、さらにうるところが多いことを附記しておく。

さて以上、本書を通覽してみると、その傾向に政治的推移を概說風に、順序立つて叙述されたものと、總說的に書かれたものとの二とほりあることが目立つ。

後者は、通史的・概說的な豫備知識をもつた讀者には大變興味があり、示唆に富んではゐるが、それ故にまた、本大系のやうな「新しく支那研究に着手せんとする人々への無二の入門書」たらしめんことをも、その建前とするものには、不向きの誹りをまぬがれぬであらう。

また各時代々々を、數多くの人々によつて執筆されるものとしては、著者それぞれの新見解を吐露することもよからうが、たとひ月並みではあつても、一般讀者の立場をも考慮して、ゆきとゞいた書きかた――かといつて、時代的性格を把握してゐない、寄木細工的な繁冗さをいふのでは決してないが――をして戴く方が、より望ましいのではないかと思ふ。

（田村實造）

支那佛教經濟史研究の二三に就いて

一、序

支那佛教經濟史には二つの性格が認められる。一は佛教史的性格であり他は經濟史的性格である。然してその夫々に從つて佛教文化史の一部門として、又特殊經濟史の一部門として研究されてゐる。こゝに注意すべきは、この二性格が、こ

の研究に於て結びつきの點を見出してゐるのではなく、研究上の立場の差異として顯著に觀取されることである。このことは是非一考さるべきであらう。今こゝに其等のことどもに就いて貧しい考察をめぐらす所以は、そこに何らかの新しい研究への展望の一端へでも立ち到り得ればとの微意に外ならないのである。[1]

二、佛教文化史の一部門としての研究

我が國に於ける支那佛教の研究は既に久しいが、それらは主として教義の研究であつて、佛教の史的研究の必要が認め出された昨今に於ても、高僧の傳記と學說の羅列に終つてゐた狀態である。然し歷史學の發達と、一般の歷史的精神の發展は、支那に於て、支那民族によつて實踐された宗教として、支那佛教を理解せんとの機運を興し、こゝにその精神史的研究と共に、その社會史的研究とか、經濟史的研究等が、佛教社會史、佛教經濟史等と呼ばれて現はれて來たのである。

其等の諸研究は多數發表されてゐるが今便宜上、「支那佛教社會經濟史研究に就て」（支那佛教史學一ノ二）なる學界展望を發表して居られる道端良秀氏の所說に就いてみてみる。それに依ると、佛教といふ名の下に於ける總ての問題は悉く教義に結びつけられるものではあるが、今社會經濟史研究の直接對象は、教義ではなく、佛教々團に於ける社會經濟史的な關係であり、即ち「佛教々團の社會經濟史的研究」といふことであつて、それは又教義そのものの變遷の正しい理解にまでも重要である。佛教史の闡明が佛教をして愈々その價値あらしむるものであるから、「その目的は實に佛教の第一義諦を闡明するに外ならず、これは又一の新研究として、佛教を生かすものとして」（この括弧內、唐代寺院の經濟史的研究・序說六頁）充分研究さるべきであらうといふ意味の事を述べて居られる。

この所說はそれが佛教史の一部門なる事からして尤もな所である。然しその故にこそ又その研究的實踐に當つて或る制約を免れないのではなからうか。

例へば、同氏の「支那佛教寺院の金融事業—無盡に就いて—」に就いてみてみる。これはかゝる問題に就いての唯一の纒つた力作であるが、それに依ると、無盡といふ寺院經營の質業が、特に無盡なる呼稱を以て採用される所に、特別の佛教的、思想的背景があるとされ、その語源、更にその起源、目的を律典と大乘經典にみゆるものの二系統に求め、支那の場合は、印度の原始教團に於て、三寶の供養に資せられる限り、僧尼寺院の營利事業が許容さるといふ經濟的見地に立てる律典の所說に據つたものではなく、あくまで無盡を佛教の福田思想の發露、佛教の實踐的修業として說ける大乘經典の精神による社會救濟事業たりし事を論證し、それが庶民唯一の金融機關として、又寺院經濟組織上重要な役割を演じて發展した事は、寺院の本質上當を得た制度といふべしとて、北魏の僧祇粟から始めて、梁の武帝の十無盡藏を經て、それが最高潮に達した三階教の無盡、その他の寺院に於ける無盡、更に宋代に於ける長生庫・解庫・典庫・更に後世の寺庫に及び、貸借の樣式を述べ、最後にこの機關が貧民救濟機關として大に活躍しつゝも遂に高利貸的に墮した弊を指摘して終つてゐる。

以上無盡なる金融事業は佛教本來の福

田思想から出た社會事業であつた事を中心に論述されて居り、これが佛教を闡明し、愈々價値あらしむるものといはれてゐる所である。

が本論文の歴史把握には、所謂佛教史的の型と安易さが感ぜられる。然して一方三島一氏は無盡財、長生庫の事を述べて、それは寺院の寺庫の餘剰物を流動資本として運轉せる利殖即ち商業的富の蓄積であつて、三階教のそれも寺院の社會事業か否かは問題だとし、（唐代に於ける寺院經濟）更に支那寺院はその經濟的發展の必要上種々なる一見社會政策的行爲をさへ行つたとも言はれてゐる。（支那佛教經濟史の研究一四九頁）

こゝに食ひ違ひが生じて來た。道端氏が弊に墮せりと悲しんで居られるのを、三島氏は、そこにこそ眞の社會經濟史的な姿があるとし社會經濟上の問題として採り上げて居られるのであらうと思ふ。では次に轉じよう。

三、特殊經濟史の一部門としての研究

こゝに於ても三島氏の「支那佛教經濟史の研究」（歴史學研究一ノ二）なる論述がある。それに依ると、人は教へる前に食はねばならないから、教團の衣食住、その獲得の諸源泉延いては經濟的諸關係が問題となる。寧ろ社會經濟的基礎の上に教團が組織され、教理が形成され、民衆の上に宣布されるので、この研究は學問的興味ばかりでなく、民衆に宗教の何ものたるかを具體的に示唆する教訓である點にこの研究的意義が認められる。しかも從來わが學界に於ては不當にも佛教を社會經濟より切り離して研究することが流行してゐるが、かゝる正しい社會經濟史的立場の喪失は、徒らに混迷と惑亂とを招くのみである。では正しい立場はといふと「支那佛教々團は民衆の上に聳立する存在であり、國家との密接な關係を有しつゝ、封建的大地主として、商業的富を蓄積し、不勞に於て自から生活し、その代償？として、來世の幸福？と現世の諦觀とを、教理の上からも民衆に示し、なほその發展の必要上、その經濟的活動の過程に於て、種々なる一見社會政策的行爲をさへ行つたのである。こゝに支那佛教經濟史研究の正しい觀點があり、從來諸家の方法論に於ける缺陷もこの立場から指摘されねばならぬであらう」といふのである。

さてかゝる立場に於ける實際の勞作たる同氏の、例へば「唐宋時代に於ける貴族對寺院の經濟的交渉に關する一考察」に就いてみよう。著者もいふ如く、國家權力を代表する皇親・貴族の寺院寺産の占有兼併の事が論述の中核である。南北朝以來寺院經濟の膨脹は、權門勢家と種々經濟的交渉を持つと共に、一方それを喜ばざる國家の拘束を度々受けたが、中でも國家權力を代表する皇親・貴族は寺院經濟に喰ひ込んで行つた。それは墳墓の菩提所ともいふべき私寺にして、自家より住持を置き、科賦を免ぜられ勅額を下附さるゝ功德墳寺（功德院）なる形式を以て即ち既設の有額寺院を指射して功德墳寺となすことに依り、新寺建立の經濟的負擔を免れ、且つ豐富な寺産と、賦科免除の特權を享受する事に於て貴族の寺院兼併が形成される。かゝる現象は大觀年中（北宋徽宗）頃から文献に認められる。宋初に墳寺、唐代にも功德院といふのが散見し、同じ趣のものと推測されるが、南宋に入つてこの現象が顯著になり、經濟上にも政治上にも大問題となつたので

ある。以上その要旨である。

更に、「封建的大土地所有の發展過程に於て、專制的國家權力をその背景に有する皇親・貴族は恐らくその經濟的發展の必然性の故に、あらゆる障害を排して寺院經濟の虧隙に食ひ込み、教團をその內部より崩壞せしめ、これを無力化した佛教々理はかゝる支配階級の攻勢の前には、何の意味も有しなかつたらう。かく理解する時、唐宋貴族の寺院占有に關する史的意味が始めて明かに把握され得るであらう」とその史的意味を摘出されてゐる。

以上功德墳寺の問題を中心に、純粹に經濟的關係を抽出して、全く經濟史的觀點から、（尤も功德墳寺そのものの性質に就いては、經濟的なそれのみではないが）寺院と國家・貴族との相關々係に於て、――特に貴族の側よりの寺院への攻勢といふ一側面からのみであるが――鮮かに描き出されてゐる。が、直言を許されるならば、その經濟史的立場に固着する餘り、社會一般の歷史的な推移への位置づけが不鮮明なのではないかと思ふ。卽ち、唐代の功德院、宋初の墳寺、そして功德墳寺への外形的には一聯の現象の夫々の歷史的意味內容、更に氏の謂ふ唐宋時代に於て兼併される寺院と、兼併する支配階級そのものの夫々の性格、そして氏が謂ふ貴族の經濟的攻勢が、唐宋時代といふ長い時代に於て、何故特に宋中期以後に於て著しく表面化したか等の諸點に今少し考慮が拂はる可きではなからうか。

思ふに、支那社會の近世的移行が唐宋交替の交にあつた事は、內藤博士を初め諸家の論證された所である。その著しい現象は、中世的門閥貴族の沒落と、近世的獨裁君主權の確立と、それに依存する近世的士太夫（一門閥に據らざる貴族、君主權に依存する一代貴族）の成立、そして相對的には庶民の地位向上であると言はれてゐる。さて塚本氏が巧に描寫されてゐる如く（唐中期の淨土教參照）唐代佛教は貴族佛教であり、貴族的存在であつた。そして普通に言はるゝ如く、一般中世貴族の政治的社會的地位の沒落が安史の亂を重大な契機としたとすれば、支那中世佛教のそれは唐武宗の廢佛、五代の戰亂、特に後周世宗の佛教整理に求められるであらう。この事は別に詳細に論ぜらるべき問題であらう。（手つ取り早くは、稻葉博士「經濟上よりみたる支那佛教徒の地位」參照）そしてその後を受けて宋の太祖、太宗が、佛教復興者として讃嘆されつゝ、自己の獨裁君主權確立體制下に再建した佛教は、旣に中世貴族的な政治的社會的勢力を剝奪されたものであつたことに留意さるべきであらう。そして勿論宋代に寺院の經濟力が增大した故もあらうが、又叙上の事由から、政治的社會的勢力を、喪失せる經濟勢力を支配者の側に於て問題とすることが、宋代に於て特に顯著な現象として展開したと解すべきかと思ふ。

然れば、功德墳寺による寺院兼併といふ經濟上の問題も、以上の如く純粹に經濟的ならざる事象を參考することによりかへつてより明かになるであらう。然る時には、支配階級の經濟的攻勢として教團を內的に崩壞無力化せしめた所に第一義的な史的意味があるといふよりは、前述の如き支那歷史そのもの、そして寺院勢力の政治的社會的推移に隨伴した經濟上の現象と解すべく、その限りに於て

氏の所說の如く、兩者の經濟的對立、貴族の經濟的攻勢として圖式的に意義づけることは深い洞察ではあるが、それが又教團の勢力の一層の退化を來したとしても寧ろ第二次的な意味ではなからうか。

四、歷史學として

こゝでもう一度歷史學の立場として考察してみることとする。

先づ道端氏の言はれる所は、過去の佛教史研究の狀況からして尤もなことであるが、そこに一の制約を免れない。それは何より佛教の價値を減ぜしめてはならないことである。第一義諦の闡明を目的とせられる所以である。然しこの研究を以て直接的に佛教の宣揚に資せんとするならば、歷史學の生命たる客觀的態度の喪失を來すものである。殊に佛教經濟史研究に於ては、必ずしも直接的には佛教の闡明には有益でない。時にはその反對の如き事さへある。現在の「佛教史の研究が多く佛教學者の手になり、少くも佛教徒により、研究されてゐるが故に史的研究にとつて最も必要な客觀的批判的態度を佛教そのものに向け以て或る時代に於て佛教が占める位置役割を理解することはかなり困難ではある」が、この困難は次第に克服されてゆかねばならない。

さてこの方面よりの研究の長所は、何よりその佛教的特色の解明にある。それなくしては佛教經濟史たる名に適しないであらう。

そしてその短所は、三島氏が批判された所である。無盡の語源や、その精神的根柢が如何樣に說明されても、それが利殖事業として行はれた、一般經濟現象との關係こそ嚴たる事實である。そこで正しい社會經濟史的立場に於ける研究を提唱されるのであるが、こゝでは極力經濟外的な考察を排して、純粹に經濟史的に考察することが主張されてゐる。これ又この研究の一段の進展を促したものである。然しこゝでも又その立場を限定する餘り、ある狹さを感ぜしめるものがある第三節に於て、淺學をも顧みず愚考を述べた所以である。然れば經濟史を支那歷史一般の內に位置づけて解釋しないで、經濟史で以て歷史を解釋する結果になる恐れなしとしないであらう。同樣の事が經濟史の研究を以て直ちに支那佛教全體を論ずるといふ點に於ても言はれ得るであらうこのことは又特殊史と一般史の問題にまで展開するであらうが、こゝでは佛教經濟史が、他の種々の史的現象の關係の內に占める地位關係を充分考慮さるべきことを指摘しておく。

さて此處迄來て、此處から新しい研究への何らかの展望に到るべきであるが、不肖私には未だそれ程の學識もない。たゞこゝで學界の傾向を眺め、以て何らかを得るよすがともなればと思ふ。そしてこれは一に私達の今後の實踐にかゝつてゐる問題なのでもある。

それとても前述の兩者を契機として出て來るのであるが、それらの折衷でない事は勿論である。極めて抽象的な言ひ方ではあるが、佛教經濟史といふ特殊史を如何に一般史に於て理解してゆくかといふ點に於て、從來の二つの立場は、その夫々の立場に於て相歩みよるであらう。

私は佛教史の立場からのかゝる傾向を塚本氏の論文に於て感じ取られると思ふ例へば支那佛教經濟史の色々な場合に引かれる問題「北魏の僧祇戶・佛圖戶」であるが、氏はこの經濟現象を北魏の歷史のうちから理解されてゐる。先づ北魏佛

教の歴史から說き、僧祇戸に充てたといふ平齊戸の意義を明かにし、その設置年代に就いての釋老志の誤謬を正し、次いで僧祇戸の性質と僧祇粟の運用に就いて主として經濟的性格――その農奴性を說き、次にその佛教思想的背景を述べ、ついでその普及に至つた理由を種々の方面から、思想的に、社會的に、經濟的に――北魏の農業政策等から考察し、その功罪影響に終つてゐる。

尤も本論文に就いても種々の批判もあり、猶ほ經濟的な聯關に不充分の憾みもあらうし、又今こゝで項目を擧げたのみでは充分ではないが、本論文を讀めば佛教史といふ特殊史から一般史を背景とせる歴史學の立場への新しい歩み寄りが感ぜられると私は思ふ。そして特殊經濟史の立場よりのかゝる進展を私は切に期待してゐる。

然して其處に問題となるのは、佛教的性格、又は經濟的なそれの强調ではなく佛教史的現象と、經濟史的現象との兩者の間の相關々係であらう。そしてこの點に於ても又兩者は相歩み寄るであらうと思ふ。

猶ほ前述二氏の立場の相異は、佛教の外的な社會的經濟的活動と雖も、その第一の特性を宗教的な源泉から受けるのであつて、それが教團、社會の要求その他のことから方向が轉換されても、先づ充たされるものは宗教的欲求であるといふのと、佛教の活動は布教も含めて總べて先づ第一にその源泉を經濟的欲求から受けるのであつて、それが宗教的活動とみられる時でも、先づ充たされるものは經濟的欲求であるといふ二つの命題として一般化出來ると思ふ。然しこの問題は、人間文化一般の、更には人間性そのものの究明にまで掘り下げらるべきであつてこゝでは輕々しくは論じないこととして上記二氏の立場の相異の根源が實はこゝに在ることを指摘附記するに止めておく。

先輩諸賢の勞作に對し敢て蕪言を弄した罪を謝する次第である。

註

① 佛教經濟史の概念に就いては本論中の道端、三島氏の所論に明かになるであらう。私は「佛教的諸經濟現象の歴史的研究」とでもいへばよいかと思ふ。今までの研究に就いては、道端氏「支那佛教社會經濟史の研究に就て」（支那佛教史學第一卷第二號）に詳細なる紹介がある。參照されたい。今便宜上主要なるものに就いて題目のみ左に掲げる。以て大體の傾向を窺へるであらう。

イ、寺院内の經濟構造、寺院の經濟的行爲、及び其の諸源泉等に關する研究――明代の寺田（清水泰次、東亞經濟研究八ノ四）支那に於ける寺領の一考察（道端良秀、叡山學報七）支那佛教寺院の金融事業（同、大谷學報十四ノ一）唐代の寺田僧田と僧尼の私有財産（叡山學報十七）唐代寺院の經濟史的研究（佛教法制經濟研究所モノグラフイノ、九）寺院經濟資料と長生標、同補考（稻葉君山、東亞經濟研究十五）唐代寺庫の機能の一二に就いて（三島一、池内博士還曆記念塚東洋史論叢）三階教團と無盡藏について（本善隆、宗教研究三ノ四）北魏の僧祇戸佛圖戸（同、東洋史研究二ノ三）唐の均田法に於ける僧尼の給田に就いて（森慶來、歴史學研究四ノ一）等

ロ、寺院と一般社會經濟との間の諸問題に關する研究――經濟上より見たる

支那佛教徒の地位（稲葉君山、支那社會史研究）唐宋時代に於ける貴族對寺院の經濟的交渉に關する一考察（三島一、市村博士古稀記念東洋史論叢）唐宋時代に於ける貴族の寺院兼併に關する一知見（同、史學雜誌四一ノ七彙報）唐宋寺院の特權化への一瞥（同、歴史學研究一ノ四）宋代に於ける寺院課税に關する一考察（同、史學雜誌四四ノ七彙報）唐代に於ける寺院經濟（同、平凡社東洋中世史第二篇七章）

ハ、支那佛教々團としての經濟的諸關係の研究――宋の財政難と佛教（塚本、桑原博士還暦記念）宋朝時代の財政難と佛教（東洋史論叢）宋代の功德墳寺に就いて（宗教研究七ノ五）唐代に於ける度牒問題（三島、史學雜誌三七ノ八彙報）宋の賣牒について（同、史學雜誌四〇ノ一二彙報）宋の度牒雜考（曾我部靜雄、史學雜誌四一ノ六）道君皇帝と空名度牒政策（塚本、支那佛教史學四ノ四）

尙ほ那波博士、佛教信仰に基きて組織せられたる中晩唐時代の社邑に就きて（史林二ノ四）梁戸考（支那佛教史學二ノ三・四）中晩唐時代に於ける僞濫僧に關する一根本史料の研究（龍谷大學佛教史學論叢）等には敦煌出土史料による唐代寺院經濟の貴重なる研究が多い。

② 功德墳寺に就いては、道端良秀氏、支那に於ける寺領の一考察（叡山學報七）仁井田陞氏、唐宋法律文書の研究第三章施入文書第一欵土地施入と文書の作成・小川貫弌氏、宋代の功德墳寺に就いて（龍谷史壇二ノ一）等參照。

③ 内藤博士、概括的唐宋時代觀（東洋文化史研究所收）・那波博士、唐宋時代比較史論（アジア問題講座七）・隋唐五代宋社會史（支那地理歴史大系七支那社會史所收）・東洋文化史大系、宋元時代の部の夫々の所・曾我部靜雄氏、北宋政治史（支那地理歴史大系五支那政治史下所收）・佐伯富氏、王安石（支那歴史地理叢書）等參照。

④ 板野長八氏「支那佛教史學」（雜誌に對する批評紹介（歴史學研究七ノ七、九四頁）

（善峰憲雄）

懷安だより

曇曜五窟と取組んだけれども、なかなか終らず、懷安の漢代墳墓調査の先發として岡崎君と二人出て來ました。夕ぐれ渾河の流れを遡つて萬安もとの紫溝堡に着く。仲々賑やかな町で降りる客が相當にある。昨年と變つたことは、縣公署が此處にできたためか、日本人の姿を見ることだ。町もにぎやか、買物も一とほりまにあふ。たゞ西瓜をあちらもこちらも山のやうに積んでゐるのは意外であつた。果物も多い。葡萄、沙果等々。面白いのは夜になると汽燈をつける。之は上田參事官の創意かとも思ふが、辻々に汽燈がつく。その間にランプの灯が點々として人々がざわめいてゐる。上田氏得意の明朗政治かも知れぬ。萬安の鎭公所も赤煉瓦の新築。縣公署はもとの師範學校を改築中。しかしとにかく一番活潑に縣政が運用されてゐるのをみる。明日から下調べで少し歩くつもりです。（九月二十一日附森宛書信）